

情報学研究科に入学した君たちへ

入学おめでとう。名古屋大学大学院情報学研究科にようこそ。君たちは情報学研究に相応しい学力と能力を身につけて入学してきました。情報学はまだ新しい分野で、この情報学研究科も3年経ったところです。これから一緒に情報学を創りあげていきましょう。

研究はサイクルと言われます。現在の課題を見つけ、既存の研究を調べ、新たな発想をもとに新しい価値を創り出し、評価し、そして次の課題を明らかにします。AI や SNS、XaaS など、いまや情報は社会を動かす力を持つようになりました。情報学の研究サイクルは、世の中の多くの問題解決の基本となります。情報学のどのような分野を研究するにせよ、研究サイクルを身につけて卒業し、情報社会に貢献してください。

さて、名古屋大学駅や大学構内で目にしたかもしれませんが、私たちは君たちに「尖った情報技術で やわらかな人間社会をつくろう」というメッセージを贈りました。今日は、このメッセージの意味について、少し私の思いを述べさせていただきます。

情報学にはAI など尖った技術が数多く存在します。それによって様々な問題解決が可能です。その中で私たちは「やわらかな人間社会をつくろう」ということばを選びました。英語では"Let's create a resilient human society"と表現しました。いろいろな意味が込められていますが、私は次のように思っています。日本語の「やわらかさ」には「軟弱」など弱いイメージもありますが、ここでは"resilient"と表現しています。柳のようなしなやかさ、どちらかといえば、やわらかさに秘められた強さ、のイメージです。災害が起こったときの復活力という人もいます。いま COVID-19 が流行し、様々な問題が起こっています。名古屋大学では入学式も取りやめになりました。多くの会議が中止になっています。そのときに、オンライン会議システムが活躍していることは知っているでしょう。従来ならば止まってしまった活動も、少しずつ進めることができています。このようなやわらかさを社会にもたらす力が情報学にはあるのです。

人間が造ったものや社会が、時としてバランスを崩して元に戻らず、それが我々を取りまく環境や人間自身にまで不可逆的な影響を与えていると言われていています。私たちはそのような「硬さ」を Well-being な状況とは思っておりません。社会にやわらかさを持たせるために、情報学は貢献できると信じています。君たちの研究により、尖った情報技術でやわらかな人間社会をつくろうではありませんか。

2020年4月1日

名古屋大学情報学研究科長 枝廣 正人